医療福祉デザイン学科との協働プロジェクトを通した医療福祉学科在学生の学び
－専門性と連携への意識変化について－

○　川崎医療福祉大学　　氏名　小田桐　早苗（会員番号 8491）

キーワード３つ：グループワーク、専門性、協働

１．研 究 目 的

社会福祉士は、医療の高度化・専門職の分化を背景とし、専門知識を有しながら他の専門職について理解し、チームとして問題解決できる能力を養うことによって、多様化、深刻化している諸問題に対処できるような人材育成が求められている。このような中、我が国においても医療・福祉系大学教育における IPE 教育の実践報告が増えている。特に本学においては、医療福祉系学科のみならず、医療福祉デザイン学科を有し、新しいコミュニケーションの形を主体的に提案し、実践できる人材の育成を行っている。そこで、筆者らは、医療福祉の当事者の問題へのアプローチを専門的に学ぶ医療福祉学科の学生と、医療福祉のテーマについて、その発信・表現について専門的にまなぶ医療福祉デザイン学科の学生との協働プロジェクトを立ち上げた。本報告においては、当該プロジェクトを通した学生自身の専門的視点の意識化や啓発へ向けた連携の在り方についての意識的な変化を検討することを目的に行ったインタビューの結果報告を主とし報告を行うものとする。

２．研究の視点および方法

本プロジェクトおよび研究の視点は以下のとおりである。「啓発」をテーマとし、医療福祉学科学生および医療福祉デザイン学科学生のグループを 2 グループ構成し、啓発内容およびチラシなどの作成を行うものとする。プロジェクトテーマの選定については、医療福祉学科の学生においては、自閉症への支援に関する科目が必修として設定されており、基本的事項を学んでいること、デザイン学科においては、自閉症支援ツールなどの提案を講義内で実施している点から両学科の取り組みやすいテーマとして想定されたため「自閉症の理解・啓発」とした。また、学生自身の専門性への認識等の深まりについては、プロジェクトの取組みの各段階において個別の自記式アンケートおよびインタビューを実施し、その結果を用いて検討することとする。本プロジェクトは、最初に学科別検討を行う。これは、学科ごとの視点をより意識し、互いにその成果を知ることで違いや学科ごとの強みを意識するねらいのためである。その後、学科をこえたグループで検討する、このように 2 つのステップを踏むことで、学科ごとの視点を意識し、互いに尊重しながら協働して取り組むことができるのではないかと考えたためである。

方法は、自記式アンケートを使用し、各回に学生に記入を依頼した。さらに、前後での

半構造化インタビューを実施し、プロジェクトを通した専門性への意識や連携についても聞き取りを行った。対象は、医療福祉デザイン学科３名、医療福祉学科３名の計６名である。選定については、本プロジェクトおよび研究について説明を行い公募の結果、参加の意思を表明した者とした。対象学年は、専門科目を一定する習得していると考えられる 3 年生以上とした。

３．倫理的配慮

川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得、実施している。倫理的配慮として、本研究への参加は任意であること、匿名性が保たれること等を説明し、同意を得られたものに参加を依頼した。

４．研 究 結 果

医療福祉学科学生へのインタビューにおいて、以下のような回答が得られた。

＜プロジェクト実施前：自らの専門性について＞

「自閉症について、専門的に学んでいるのでその知識を活かせると思う」

「連携を軸に、問題解決にあたるものだと思うが、具体的にどう動くのかはうまく言葉にできない」「多職種連携の中で、利用者と支援や人をつなぐことが重要になるが、啓発という目的をもつとき、どんな連携があるのかはイメージできない」以上のように、「連携」といったキーワードや本プロジェクトでテーマとした自閉症についての知識や経験を活かし、当事者の立場に立つ視点をもつことの重要性を述べているが、具体的には言語化して述べることは困難であった。

＜プロジェクト実施後：自らの専門性について＞

「自分自身の専門性が何かを、他学科の学生の意見を聞くことでより明確にすることができた。私たちは、社会の中で何が理解されずに問題となっているのか調査し、その問題を当事者の人とともに考え、検討することを啓発の前に行うのだと思った。デザインの人にはその視点がなかったように思う。」「一緒にやることで、それぞれの強みを活かすことができる。これが私たちで取り組む以上の成果を得られると思った。それに、私達はこのプロジェクトが社会に何を訴えるものか､何を変えるためのものなのかをいつも意識してた。その視点の広さは､デザインの学生とは違うような気がした。」他学科とのグループワークを通じて、自分たちの視点を意識し、伝え合うプロセスを通して、再確認する様子がみられた。また、このプロジェクトの成果が何につながるのかといった社会への働きかけについても、発言が見られていた。

5. 考 察

目的のために協働するということを通じ、自分の視点を再認識する経験がすべての学生から発言された。このような発言の背景には、明確な命題に対するアプローチの提案を検討するという具体的な取り組みを提示されたことにより、各学生の役割が明確になり、自身の視点の自覚を促したものと考えられた。